立命館大学大学院　言語教育情報研究科

日本語教育学コース　在学生インタビュー

テーマ「日本語教育学演習について教えてください」

言語教育情報研究科の日本語教育学コースは、日本語教育について理論と実践でしっかり深められるようにカリキュラムを展開しており、日本語教師や日本語教育の専門家・研究者をめざしている方が多く在籍しています。日本語教師をめざす人のために、コースに「日本語教員養成課程」を設置し、この所定の要件を充足し研究科を修了した者には課程修了証を授与しています。2024 年度から新しく施行されている登録日本語教員の制度において登録日本語教員の資格を得るためには、この日本語教員養成課程の修了に加えて、必要な試験（応用試験）に合格することが求められます。

日本語教育学コースの実践・演習系科目であり、日本語教員養成課程の必修科目となっている「日本語教育学演習」（協定校での日本語教育実習）は、国内の語学学校・教育機関だけでなく、英語圏・中国語圏・韓国・ベトナムでの実習機会を提供するもので、国内外で活躍できる日本語教師の養成をめざした科目です。今回こちらのインタビューでは、中国の大学で日本語授業をおこなった院生に実際の実習の様子などを伺いました。国内での実習についても伺ったインタビューもありますので、是非あわせてご覧ください。

お話を伺った方　LI Caoye さん（2023 年 4 月入学）
所属コース：日本語教育学プログラム（現：日本語教育学コース）
研究したいテーマ：　第二言語習得、文法教育
入試方式：　外国人留学生入学試験
教育実習派遣時期：2024 年 3 月（3 週間）
派遣先：中国　大連外国語大学日本語学院

Q1_まずはじめに、立命館大学大学院言語教育情報研究科の日本語教育学プログラムに進学した理由を教えてください。

最初は「外国語」に興味があり、特に英語・日本語・韓国語について学びたいと大学に進学しましたが、入ったのが日本語専攻だったので、そこから日本語にはより興味をもつようになりました。また、祖父が教師だったことから、教師という職業にも関心があり、大学で先生がどのように日本語を教えるのかも気になっていました。中国の大学では中国人の先生に日本語を教わりましたが、授業で教えてもらうことよりも、独学で習得できたことの方が多かったように感じます。授業は教科書中心でしか学べなかったので、より実践的に日本語を修得できれば・・・というような思いもあり、大学卒業後は日本の大学院で日本語教育について研究したいと思うようになりました。

立命館大学の言語教育情報研究科は「言語教育」を柱としていて、しっかりと専門性を磨くことができると感じました。先生方の研究領域も幅広く、多様な側面から研究できると思いました。

Q2_日本語教育実習の参加について、その参加動機とどのように考えて派遣先の希望を決めたのか教えてください。

実習は、自分が日本語教育について理論だけでなく、実践的に教育現場に行って、様々な視点で実感しながら学びたかったので参加を希望しました。実践系の科目が充実していることは言語教育情報研究科進学

の大きな理由でした。ある程度理論や知識を基礎からきちんと学んでから、実践に移るのがいいと思っています。また、実践するとそこで疑問や興味が湧いてきて、更に新しい視点や異なった角度から理論や知識を習得したいと思うようになります。理論と実践を繰り返すことが自分の成長にとってよい刺激になると感じています。

大連外国語大学は、中国で日本語教育が学べる大学の中でもトップクラスのレベルと人気があり、非常に有名です。大連外国語大学で日本語を学んで卒業する人はとても日本語レベルが高いというイメージがあります。なので、そういったトップレベルの日本語教育を展開している現場で実習することは自分に大きな成長になると思いました。中国で通っていた大学（学部）では、間接法（中国人から中国語で日本語を教えてもらう）で日本語を学んでいましたが、日本に来て一番最初に通った語学学校では直接法（日本人から日本語で日本語を教えてもらう）でした。日本では中国人だけでなく、いろんな国籍の生徒が語学学校に在籍しているので、すべての言語の人に日本語で日本語を教えることになります。自分はここ数年直接法での日本語教育に慣れていたので、大学院で知識を得た上で改めて間接法による日本語教育を実習で捉え直したいと思いました。

Q3_日本語教育実習への参加は、まず既に派遣に行かれた先輩の報告を聞く報告会に参加することから始まりますが、先輩の派遣報告や派遣に向けたガイダンスを聞いた時の印象や感想を教えてください。

報告会で先輩方の派遣報告を聞いたときは、正直不安が大きかったです。

先輩の話で、「少し時間が余ってしまった」という報告がありました。実はこの教育実習の前に、「日本語教育学演習 03」（教育実習を履修するための前提条件となる科目）という科目で日本語の模擬授業を（教える側として）経験していました。その時は立命館大学に留学しているアメリカ人留学生に日本語を教える模擬授業をおこなったのですが、先生からは「入門レベルの学生が来るようだ」と言われていましたが、実際には比較的日本語が理解できる学生たちでした。自分たちが用意していた授業内容はかなり入門レベルを意識して作っていて、別の院生が担当する1・2週目の模擬授業を見学していた時に、レベルが違うなと感じたのですが、ブラッシュアップする時間がなく、そのまま入門レベルの授業をおこなうことになりました。案の定、相手には簡単すぎて、用意していた内容がすぐに終わってしまい、そこから急ごしらえで教案を作り、何とか授業として成立させました。

この時にとても困ったので、教える前に学習者のレベルや状況をしっかり把握してから時間を有効に使えるように授業を組み立てなければならないと強く実感しました。時間が余った時の柔軟な対処法も必要です。こういった経験もあって、今回の実習で同じ思いをするのではないかと不安がありました。

Q4_実際に実習に行ってみてどうでしたか。苦労話・よかったこと・発見・気づき・驚き・自身が成長したと思うところなどを教えてください。また、それを受けてご自身の今後の課題だと感じるところはどういったことでしょうか。

まずは、時間の問題がありました。実習は3週間あり、行く前は少し「長いな」と感じていましたが、実際はとても短かったです。最初の1週間は、まずは慣れるために実習先の先生の授業を聞くことになります。そして2週目に自分の教案の準備をして、3週目に実際に実習ができました。最初の1週間は見学しながら色々と考えて、次の1週間で、教える内容を使用する教案と教材に具体的に落とし込みました。できれば事前に予行演習をすることが必要でしたが、正直余裕がなくなかなかできませんでした。

中国の日本語教育はクラスが大人数であり、学生一人一人の様子をみるためには、様々な工夫をしなけれ

ばなりませんでした。大人数の場合は、小規模のクラスよりも授業の「雰囲気」がとても重要なポイントだと思うので、学生が積極的に聞きたいと思うように工夫をしました。導入の時は J-POP の歌詞を使ったり、小道具を使ったり、ロールプレイをしたり、活動させたり、いろんなことを試しました。そういった努力が実ってかなり教室内のテンションがいい意味で高くなったと実感しています。授業時間は 80 分なので、余らないように工夫もしました。大人数なので、レベルはバラバラでしたが、練習することはとても大切なので、覚えるのが遅い人に合わせるようにしました。そうすると、覚えるのが早い人にとっても何度も復習できるようになり、よかったと思います。社交的な学生も内向的な学生もいますが、中国は内向的な学生が多いので、社交的な学生が一人いるだけで教室の雰囲気もよくなります。

大連を選んだ理由として、日本語教育のレベルの高さ、実際に通っている学生のレベルの高さを実感してみたいということがありましたが、学生はまだ 1 年生に進学して半年の学生を相手にしていたので、レベルが二極化していると感じました。教科書は先生方による大連外国語大学オリジナルの教科書でした。この中身がとてもよくて、非常に勉強になりました。基礎日本語と会話、話す・聞く、など色々項目がありましたが、オリジナルということですべてが関連しており、一貫性があって覚えやすく、理解しやすいと感じました。30 人規模で 20 以上のクラスがあり、日本語専攻はとても規模が大きく、この人数にしっかり教えるためにはかなりの努力が必要だと感じました。

Q5_実習で習得・経験したことを、ご自身の今後のキャリアや研究にどう生かしたいと考えていますか。

今はまだ日本語教師になるかわかりませんが、もしなったとしたら今回の実習を通して、一つの授業がどのように成り立っているのか把握できるようになったので非常によかったと思います。自分自身の成長にもつながりました。今までは「リーダー」という役割を担ったことが少なく、諦めがちな性格でした。今までは複数人で協力しておこなうべきところも、一人でどうやりきるかを考えてしまうところがありました。しかし、この実習を通じて自分に自信がつき、自分の中にリーダー的な可能性もみつけることができたように思います。

また、一つの授業を「受け手」と「教え手」の二つの異なる角度・視点で受け止められるようになり、これは恐らくこれからの研究にも役に立つと感じています。